正負極聖戦

織宮征

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
正負極聖戦

【Ｎコード】
Ｎ５１２５ＢＡ

【作者名】
織宮征

【あらすじ】
２０１１年１２月。日常に生き、しかし十七年間を傍観者で在り続けた蓮堂海は、神祈市で突如勃発した連続殺人事件の概要と同一の悪夢を見ていた。
その夢が終わりを告げ、理不尽かつ不条理な覚醒めにより、彼の日常は非日常へと一変する。【神殺し】を目的とする集団――【星刻者】と名乗るこの世界で死亡を記録された者との戦いによって、海は自分が生を賜った意味を知っていく――。

PROLOG

自分を識り得た頃から、私はそれを知っていた。
自分が特別であると疑わず、自分が他者とは違うと疑わず、自分が神だと疑わなかった。
それ故に、私はこの運命を許容できはしなかった。
私が生を賜り、その目的の為だけに費やした年月が無に還ったのだから。
それは残酷などという言葉で言い表せるものではない。
――この結末は、正しく不条理だった。
だからこそ、間もなく反転する世界を醜悪だと嫌悪するのは当然と言えた。
私は特別ではなかったのか？
私は神ではなかったのか？
存在を希薄にしていってもなお疑念は尽きず、同時に果てしないほどの憎悪がこの身に宿る。
もはや宿命だ。
私が生まれてきた意味、そして存在の消滅を免れる方法はただ一つであり、
私が創造主に接触する為の方法は限られている。
それは魔術師としての禁忌に触れることだ。
この世界が始まり、どの魔術師も到達でき得なかった世界へのアクセス。
私が私という存在を維持し、創造主への接触を果たすには、最早それだけしか手段がなかった。
いや――真実、本当は理解していた。
私がボロ布のように使い捨ての存在であったこと。
もう用無しだからこそ、創造主が私を見限ったこと。
創造主の判断は正しく、創造主であるが故に正義で有らなければ

ならない。
――故に。

私は一人の【人間】として、創造主への復讐を誓おう。

この世界は間もなく反転される。
反転と同時に、私という存在も徐々に失われていくであろう。
だからこそ、この宿命を必ず完遂させる。
阻害因子を殺し、抑止力を殺し――神を殺す。
この世界を司る存在として、此処に宣言する。

さあ、【神殺し】の幕開だ――。

【序章】～侵蝕～

――自分の在り方は正しいのだと信じて疑わなかった。
そんなことを夕刻になるまで考え続け、一人海を眺める。
その日も、俺の日常に変化はなかった。
朝起床して、学校で授業を受けて、昼休みを二人の友人と過ごして、放課後になって、いつものように帰路を辿り、海岸公園の低いフェンスを乗り越え、砂浜に佇立したまま意味のない黄昏に身を任せる。
平々凡々とした、堂々巡りの毎日。退屈で、馬鹿らしいとさえ感じてしまうありきたりな物語（にちじょう）。
ゆえに刺激というものが皆無に近く、しかし刺激的な日常を望むほど活動的ではない人間。
平和という平行線を維持するのはそれなりに疲れるものだが、それは本人の根気が大きく関わってくる。
何も望まないのなら、平和に生きられる。
何かを望むのならば、非日常に関わるということ。
多くの人は、この対極的な人生のどちらか一方に属しているのだろう。
俺みたいに平々凡々と生きたいのなら何も望まなければいい。
退屈を許容し、決して刺激を求めず、例え非日常に遭遇しても傍観を決め込む。
そんな人生をもう十七年も継続してきた。
何も望まない。それ故に平和に生きられる。
だけど――何も望まないというのは、何も得られないということ。
だから俺、蓮堂海（れんどうかい）が十七年という人生で得られたものは少ない。
片手の五指で数えられるほどの獲得は有ったかもしれないが、それでも他人と比べると少ない方だろう。
「……」

でも、それは人間らしい考えと呼べるのだろうか？
こんな、人生の何もかもを悟ったような思考を、俺みたいな青臭いガキが考えるものなのか、といつも自問してしまう。
思えば、昔からそうだった。
児童養護施設で生きていた時から、俺は周りの子供とは違うと明確に認識していた。
……在り方が異なる、とでも言おうか。
俺自身、五歳、六歳の時点で他の子供達の真似をできなかった。
玩具で遊んだり、遊具で戯れたり、好きな夕食を食べて喜んだり、クリスマスにサンタクロースの格好をした施設長からプレゼントを貰って嬉しがったり。
そんな子供特有の、当たり前の感情を覚えることができなかった。
格好つけてるとか、その歳でクールぶっているという理由ではなく――物心が付いた頃から、子供の思考なんて最初から持っていなかった。
だから、俺の在り方に反感を抱いた子供達には苛められたし、施設の職員にも心配される破目になった。
きっと。
あの頃の俺は、子供として生きていなかったのだろう。

――どくん、と。鼓動が一つ高鳴った。

「……くそ」
しかし皮肉にも、俺は最近になって『欲』というものを覚え始めた。
だけど、それは普通の『欲』じゃない。こんな『欲』は普通であるはずがない。
人間の三大欲求のどれにも当て嵌まらない、どの類にも適切とはいえない未知の『欲』。
だからこそ、これは人間が感じて良い『欲』じゃない。

だって、この『欲』は紛れもなく――

「海くーん！」

聞こえてきた声に、俺は暴走しかかった思考から我を取り戻す。
背後から届いた幼い声は、これまでに何度も聞いてきた少女のもので、活発さを感じさせる張りのある声だった。

「……」

とりあえず、今は振り向いて対面するのも億劫な気分なので、俺は青い海に目をやりながらその声を無視した。

「海くーん！　やっぱりここにいたんだ！　というか返事くらいしようよー！」

徐々に近づいてくる足音と、徐々に大きくなっていく声。

「……」

今の時間帯、夕刻なのが災いしたのかそこかしこに男女のカップルがいる。周りからはそいつらの「見て、彼氏の人無視してるよ」やら「あの娘可哀想じゃね？」と好き勝手言ってくれている。

というか、隠れ話なら本人に聴こえないようにしてほしい。

「海くんっ」

と、胸くそ悪くなって胸中で愚痴を叩いたその直後、いつの間にか駆け寄っていたそいつは俺の顔を覗き込んだ。

「……」

今は『あれ』を感じてる最中である為か、まともにそいつの顔を直視できなかった。

自然、一瞥だけを送る形になる。

まだ自宅に帰っていないのか、神祈学園の制服を着服していた。
顔にも多少の汗を掻いており、呼吸も少し乱している。それでもいつも通りの笑顔を浮かべているのはこいつの人格から発生しているものなのだろう。

――御島蛍（みしまほたる）。

俺が中学卒業までお世話になっていた御島家の一人娘で、六歳からの付き合いだ。
腰まで届く色素の薄い髪に、邪気が全く感じられない大きく無垢な瞳。顔立ちはかなり幼く見え、小学生に見間違われるほど。それと比例するように身長はかなり低く、高校二年になっても百五十センチにも満たない。本人は毎朝牛乳瓶を一本一気飲みしていると言っていたが、その効果も全く表れていない（というより、一気飲みをする必要性はない）。
学校指定の制服のSサイズでも袖がブカブカという始末である。
「やっぱりここにいたんだね」
「……というか、なんでここにいるって分かったんだ？」
「海くんの行動範囲って限られてるからね。学校、自宅、海岸公園の三択。この場所を捜せば自ずと見つかるよ」
全部の場所を捜しまわるこいつの行動力に多少感服しながら、俺は呆れて溜息を漏らした。
「……お前、暇人だろ」
「むっ、そんなことないよ。今日の宿題しなきゃいけないし、お母さんは遅くなるから家事だってしないといけないもん」
なら、何で俺を捜し回ってるんだ。言ってることとやってることが全く噛み合ってない。
「でも、それ以上にやるべきことがあるから海くんを捜してたの」
「……どういう意味だ？」
些か気になって尋ねると、蛍は腰に手を当てた。
この仕草は、蛍が怒っている時に発生するポーズだ。本人は完全に無自覚らしいが。
「海くん、今日も授業サボったでしょ？」
「何で他所のクラスのお前が知ってるんだよ」
「海くんのクラスの先生から頼まれたの。御島が授業に出るように説得してくれって。海くん、三日前から度々授業を無断欠席してるんだってね」

どうやら余計な手を回されたらしい。というか他のクラスの生徒に頼み込む担任も担任としてどうかと思う。
「でも、何で急にサボり出したの？　それまでは真面目に授業に出てたじゃない」
「……」
俺は顔を逸らした。こんなこと蛍に話すべきことじゃない。というより、それ以前に会話に持ち出す理由はない。
「まだ留年するほど欠席したわけじゃないだろ。蛍が気にすることじゃない」
結果的に、俺は微妙に話の方向を変えた。のだが――
「海くんが話を逸らすのは、何かを隠してる証拠だよ」
本当に、蛍はこういうことに関しては機敏な反応を示すのだ。まるで俺のことを解りきっているかのように。
本人曰く長い付き合いだから、ということらしい。
「海くんを見てるとそれくらい分かるよ。それで、いつもどこでサボってるの？」
「……丘だよ」
あまりにしつこいので、それくらいは教えることにした。
「丘って、敷地内の地獄階段を上った所にある草原丘のこと？」
「あぁ」
俺達が通っている神祈（かみき）学園は、この神祈市（かみきし）の山地方面――市街地からそれなりに離れた場所に建てられている。元は山林地帯であった場所に建築されたがゆえ、敷地内には至る所で傾斜がある。例えば東棟の校舎と西棟の校舎で高度が全く違い、二つの校舎を繋ぐ渡り廊下もほぼ階段式の造型と言っても過言ではないだろ。
その敷地内の中でも、東棟の校舎の裏にある長い石段を登り――これが蛍の言った地獄階段である――頂上まで辿り着いた場所が草原丘となっている。神祈市の全景を鳥瞰でき、眺めが良い場所で有名だが、そこに辿り着くまでの過程――つまり地獄階段を登る者は滅多にいないので、立ち入る生徒は限りなく少ない。

そんな場所にサボりに行くのだから、傍から見れば変わり者の部類に入るだろう。
「でも、わざわざ地獄階段を登ってまでサボりたい理由ってなんなの？」
で……こいつはこういう本質的なところを突いてくる。本人は至って普通に問いかけているつもりなのだろうが、少しは問われる身になってほしい。
「町を眺めてるんだよ。その為の草原丘だろ」
嘘は言っていない。実際、サボる理由は異なるが、草原丘に着いたら町を呆と眺めながら過ごしている。
「その為ってこともないと思うけど……」
低く唸りながら、蛍は腰に手を当てたまま思案顔になる。
それを一刻の間続けると、両手を叩いて再び笑顔を浮かべる。
「分かった。今日のところは見逃してあげる。でも――」
安堵しかかったのも束の間、蛍は俺の顔を覗き込みながらこう忠告した。
「これ以上やんちゃを続けると、お父さんに言って家に連れ戻してもらうからね」
「う……」
それは極力御免被りたい。というか何の為の一人暮らしだと思ってる。中学三年にもなって、毎日一緒に寝ようとか馬鹿なことを言うから家を離れたんだぞ。
「……善処する」
断固としてその提案を阻止したいが為、俺は溜息混じりに妥協することにした。
――気づけば、日没まで間近の時刻に差し掛かっていた。

◇

海岸公園を後にして、俺と蛍は帰路を踏んでいた。

蛍の家は西区の住宅街にあるが、俺のマンションは町の中枢――市街地にある。海岸沿い公園が東区にあるので、自然、俺と蛍は市街地で別れることとなる。
帰路の途中、俺達の間に言葉は少なかった。蛍が話題を振って、俺が適当に相槌を打つ。そんなやりとりがもう二十分も続いていた。
……本当はちゃんと話し相手になりたかったのだが、今の俺にはそんな余裕も根気もなかった。
肩を並べて歩いているのに、歩幅を合わせて歩いているのに……俺達の距離は、実際より凄く遠く感じた。
「……ねえ、海くん」
そんな空気の重さを、蛍はしっかりと認識しているのだろう。ぎこちない口調と共に、彼女は視線を俺に向けた。
「悩みがあるなら、いつでも相談に乗るからね。一人で抱え込むのは海くんの悪い癖だよ」
おそらく精一杯であろう笑顔を浮かべて、蛍はそう言った。
でも、俺はその笑顔を直視できなかった。

――ソノ、笑顔ガ、俺ノ心ニアル、『欲』ヲ。

「……悩みなんてないから、心配すんな」
分かれ道に着いた時、俺は一度だけぎこちなく笑って。
「じゃあな」
と、蛍から逃げるように走りだした。
決して振り返らずに。
決してあの笑顔を思い出さないように。
そして――この『欲』の正体である『殺意』を鎮めることに努めながら。

◇

自宅に戻り、まず最初に洗面所に駆け込んだ。
冷水を溜め込み、その中に顔面を浸して煩悩、雑念を削除し、思考をクリアにする。
「はあ、はあっ……はぁ」
それでも、この躰に潜むワケの解らない違和感は払拭されず、胸の内側で高鳴るおかしな動悸は治まらず、脳内を無数の蜘蛛が這うかのような悪寒は止まらない。
「――何なんだよ……」
もう三日もこんな状態が続いていて、いい加減うんざりしてくる。
この違和感は普通の感覚じゃない。普通であったなら、俺が正常なら――

――人を殺したいだろう？

……俺の在り方が正しいなら、こんな声が聴こえてくるのは絶対におかしい。
俺が十七年間も傍観者で在り続けたのは、俺でも理解のできないことなんだ。
なのに――なんで今になってこんな感情が湧き起こる？
俺は今でも傍観者で、だからこそ誰に対しても殺意なんて抱いていないはずだ。それは俺の生きてきた十七年間が証明しているし、それを絶対だと認識しているのは紛れもない蓮堂海だろうが。
この声が幻聴ならまだいい。もう既に気が狂っているのなら、精神科の病院に行って薬を処方してもらえばいい。
でも――
「……新聞」
俺は再び玄関に戻り、ポストに入っていた夕刊を手に取って一面を開いた。
そして、そこには――
「また、か……」

そこには、三日前に勃発した連続殺人事件の続報が綴られていた。
神祈市は犯罪や事故が少ないことで有名なのに、三日間連続で三人が殺されたとなると公僕の面子も丸潰れだろう。
犯行時刻は決まって深夜。通り魔的な殺人とニュースでも報道していたが、問題となっているのはそこではない。
俺が重要視するべきは、その犯行手口だ。
死体となって発見されたのはいずれも十代後半の若者。接点や共通点は警察が調査しているとのことだが、関連性で言うならば本質はある程度見えてくる。
一人目は刃物ではない『何か』で頸を真二つに切断された状態で発見。
二人目はまるで手を突き刺したかのような痕跡があり、腸がはみ出た状態で発見。
それを鑑みるといずれも猟奇的で、人間の尊厳を蔑ろにした犯行であることに変わりはない。
文面を読み進めていく。

――どくん、どくんと。

止せば良いのに、俺はそれを確かめたいという悪い好奇心だけで目を走らせた。

――どくん、どくんと。

これ以上苦しみたくないのに、これ以上狂いたくないのに――その為に朝のニュースを見るのを止め、クラスに浸透しているであろう噂を耳にしない為に今日一日の授業を欠席したというのに。
俺は、その一文を読んでしまった。

『昨日の深夜十一時半頃、連続殺人事件の新たな被害者が出る。神

祈市、市内在住の十七歳の少女は、四肢を断割された状態で発見された』

……奥歯がギリッと軋んだ。

無意識の内に行った行為の意味を明確に認識する。

それは事件を起こしている犯人に対しての怒りだった。俺は傍観者として静かに暮らしたいのに、理不尽かつ暴虐的なまでの不条理を突き付けられるからだ。

そう。

この犯行手口は、俺が見た夢の内容と全くの同一だった。

三日前から始まった悪夢であり、俺が夜な夜な人を殺しに行く非現実的な夢。

――三日前は手刀で頸を切断し、

――二日前は掌を突き刺して腸を抉り出し、

そして今日、両手の握力だけで少女の四肢を千切り、千切り、千切り、千切る夢を見た。

もはや悪夢の範疇に収まらない。だって俺は実際にそれを夢で体験しているのだ。一度ならば鼻で笑い飛ばせるだろうが、それが三日も続けば俺の見る夢と事件に関係性が在るのではないかと勘ぐってしまう。

信憑性は増していき、自身に対する疑念を抱き、しかし総じて何も理解できない結果に憤慨する。

――俺はあのおかしな声に従って、夢遊病のように町へと出て人殺しを行っているのだろうか？

あれは夢ではなく、ただの現実であると？

「ありえないだろ……」

握り拳で玄関の扉を強く殴打する。

こんなのは俺の思考じゃない。論理的じゃないし、何より俺がそ

んなことをする理由がない。
何らかの行動を起こすというのは、それ相応の起因となる出来事が存在するものだ。でも、俺は人を殺したいだなんて考えたことはないし、それに刃物も使わずに人間個体の力だけで首を切断したり、腸を抉り出すのはありえない以前にあってはならない。
それが可能なのはもはや人間ではなく、化け物の類だ。
あれは夢であるが故に可能な出来事。
現実ではなく、非現実という世界だからこそ可能な事象。
だから……何も心配することはない。
「俺が……」
人殺しなんて、するはずが、ない。
俺はこれからも傍観者で在り続けるだけ。だから、こんなことに思考を働かせる意味はない。
「……」
――今日はもう寝よう。
そう考え至り、俺はベッドに荒々しく寝転んだ。
心因的な疲労が溜まっていたのか、眠気はすぐに襲ってきた。
でも、否定はしない。
あの悪夢をもう見ないことを祈りつつ、俺は睡魔に身を委ねた――。

◇

その日の午前零時。昨日が終わり、今日が始まった瞬間（とき）。
海岸公園の砂浜に、小型の隕石が落下したような形跡があった。
砂浜を深く抉った、一種の小型クレーターめいた二つの凹凸部分に、その少年と少女は佇んでいた。
少年は限りなく黄金に近い金髪に、青海のように透き通った碧眼、整った顔立ちをしている。身長一五〇センチほどの矮躯にはおよそ似合わない黒色のスーツを着込んでおり、右手には大型のアタッシ

ュケースを握っていた。年齢は十四、十五歳前後だと推測できる。
対し、その右後ろのクレーターに佇立するのは、黒色の黒髪をポニーテールにして腰まで流している少女。瞳の色は、墨で塗られたかのような漆黒色。銀髪の少年と同じく、黒色のスーツを着服している。身長は女性にしては高めで百六〇センチ後半ほど。こちらの年齢は十七、十八歳ほどと窺える。
そして左手には、少なく見積もっても三尺以上はある黒鞘に収まった大太刀が握られていた。
「さて――こちらに着いたはいいけど、これからどうするかな？」
問いの投げかけ相手としては、この場にいる黒髪の少女のように見えるが、少年にしてみれば自分自身に対する問いかけに過ぎなかった。小首を傾げながら口元に笑みを浮かべるその様はあたかも天使の笑顔を連想させるが、決してそのようなものではない。
喩えるならば、破壊を行いたいがゆえに嬉々している者が浮かべる高揚的微笑。本物の殺戮を求める者としての存在誇示に近い。
「クライン。私達の標的はあくまで『彼』です。不要な行動は慎むように」
クラインと呼ばれた少年の傍らに移動した少女は、その躰から迸らせている殺気を打ち消すように咎めの言葉を放つ。
クラインは自重するように殺気を鎮静させ、傍らに移動した少女を見上げた。
「頭の片隅程度には入れておくよ。――それより泉（いずみ）、もう気付いてる？」
問いかけとしては些か言葉足らずな点があるが、泉と呼ばれた少女は静かに首肯した。
「すでに『彼』の躰から剥がれ、別の人間を依代としたようですね。『起源式』は誤差なく成立しているようなので、一時的な分離でしょう。その点については私が探りを入れます。
……問題なのは、その依代となった人間が全くの無関係者ということですね。それも創造主の娯楽なのか、それとも何らかの計算の

内なのか、はたまた全てが手の内なのか。その辺りは何とも云い難いですが――【正負極聖戦(せいふきょくせいせん)】に関わりのない人間を斬るのは、些か不服と言いますか」

その言葉を体現するように、少女――泉は口元に小さな歪みを刻む。

最初の敵対象となったのがただの一般人。『彼』が本質を認識する為ならば安い代償となるだろうが、泉の個人的な意見として、極力一般人を巻き込むような真似はしたくなかった。

「甘いね」

その考えを正すように、クラインは一言を以って断じた。

「甘い、甘い、甘すぎる。君は昔からそうだ。一般人だけは殺さないなんて自己満足に浸るのはもう止めたらどうだい？　それはただの偽善だ。あちらの世界の人間を千人斬り殺してきた君には全く似合わない。そんな考えを永遠に続けるつもりかい？　君は自分の【始界(しかい)】を日常思考に置き換えている節がある。自身に永遠という禁忌を課したところで、得られるものなんて何も無いよ。ボク達はただ、あの人の指示に従うだけの存在だ。ナンバーズ内で唯一『コード』を刻んでいない君に言っても、無意味なことなんだけどね」

何がおかしいのか、クラインはくくく、と喉の奥で笑う。しかしその笑いは、完全に嘲笑と呼べるものだった。

「クライン」

それ故に、泉の視線は射貫くように厳しくなる。玲瓏な声質に不似合いな、強い語調。

「私に説法する前に、貴方こそ先走らないようお願いします。対極反転を理由にしてロンドンを滅ぼした件、忘れたとは言わせませんよ」

「分かってるよ。あの人の期待を裏切るような真似はしない。まあ実質的に考えて、今のロンドンではそれもなかったことになっているとだけ反論させてもらうよ」

そう、世界が一度塗り替えられた以上、そんなくだらない過去を

悔やむ必要はどこにもない。
古い世界は反転し、新たな世界が創世された。
それ故に、この世界に辿り着いた彼らは正しく異端と呼べる存在であった。本来存在するはずのない存在。古い世界の残滓。反転を行う前の世界から跳躍した者。

彼らは、この世界において死亡を記録されている人間だ。

「では、始めます――」
故に、彼らは古い世界の神に義を唱えなければならなかった。
そうして、二人は同時に夜空を仰ぎ、其処に誓いを宣言する。
『我らは星の起源を刻む者――』
満天の星々が煌き、深々と輝きを放つ遥か地上。
「シュテルンナンバー2。星刻者（せいこくしゃ）、クライン・エレイス」
「シュテルンナンバー4。星刻者、連城泉（れんじょいずみ）」
唄うように滑らかに、彼らは言葉を紡いだ。
『我を導き、我を救済せしめた【負の神】の名に誓い、此処に超常を証明する。そして我は――』
この世界の神を殺す為に、貴方の手足となろう。

……。
……。
では、今日も語るとしよう。
私にしてみれば、君の殺意は決して騙りではないのだが、君が偽物だと信じたいのなら好きにすると良い。
君は君の考えを貫けば良い。例えそれが正しくとも、誤っていようとも――傍観を続けた結果、事態がどのような局面に迎えようとも、それは君の責任なのだから。

故に、君は来たるべき瞬間を待つとよろしい。その瞬間に辿り着けば、自ずと行動するべきことは垣間見えるであろう。

君はただ動けば良いのだ。あぁ、チェス盤にはすでに君という駒が配置されている。逃避は叶わないので、それだけは了承してもらいたい。

私の作ったチェス盤にはポーンが存在しない。つまり、キング、クイーン、ルーク、ビショップ、ナイトの五つの駒だけで戦う特別ルールだ。最初の盤には二つの駒を置き、そこから必要と状況に応じて残り三つの駒を盤上に増やしていくという趣向も凝らしている。中々に娯楽性があるだろう？

こちらの手駒は今のところ、君とナイトのみだ。相手の手駒は――ふむ、ビショップとルークか。

であるならば、私はまずナイトを動かし君を守護するとしよう。私の創造したナイトは頭が良い。戦況での劣勢を覆すだけの『頭脳』を持っているだろう。

さて……それでは、駒を動かしながら語事の本題に入るとしよう。

まず、君には私の手駒として覚醒めてもらいたい。今の君では相手の手持ちであるキングを打ち取ることはおろか、盤上に在るルークとビショップにも勝てないからだ。

次いで、君には傍観者としての役目を終えてもらう。君も感づき始めていると思うが、本来、君は日常に生きる者ではなく、世界に対して傍観を決め込む者でもない。

非日常に身を投じる者であり、私の盤上で活躍する者なのだ。

どれだけ傍観者を気取っていようとも、世界の不条理に巻き込まれるとそのような戯れ言など言えなくなるだろう。君は理不尽だと私を謗るだろうが、これは決定事項である。故に従ってもらう。

さて。ではまず、君の役目を変質させよう。

これは、近い日に相交えるビショップとの交戦においての変質であり、本質の覚醒。

気に入ってもらえるかどうかはまだ判りかねるが、良い結果にな

るよう期待している。
あぁ……言い忘れていた事柄があったな。
君の稚拙な推測は、しかしそれなりに的を射ていたぞ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5125ba/

正負極聖戦

2012年1月14日03時48分発行